

答申第1号 文政13年おかげ参り柄杓

種別	有形文化財（歴史資料）
名称及び員数	文政13年おかげ参り柄杓 1点
所有者	生駒市東新町8番38号 生駒市役所 生駒市長 小紫 雅史
所在地	生駒市山崎町11番7号 生駒ふるさとミュージアム 館長 山内 紀嗣
時代	江戸時代後期 墨書銘 文政13年（1830）
概要	本品は、文政13年のおかげ参りの際に俵口村文七が携行した柄杓である。筒状の竹一節分を利用し、上下逆転させて制作したもので、茶道の点前道具に酷似した仕上がりである。現状は柄が欠損している。

やや胴張りの器は、上端部の直径が6.2cm、底部の直径が5.2cm、高さが5.5cm～5.8cmである。器の外表面は表皮を削り磨き、口縁端部の内外表面や外面底部寄りを丁寧に削る。外形はやや不整形で重量バランスも均等でないことから、茶道用の柄杓ではなく日常雑器とみるのが妥当である。刺し通しの柄が取り付けられていた痕跡も残り、柄を装着した復元長は41.0cm前後と推定する。

外面の墨書は、縦書きの「大神宮」を中心に、向かって左側には円周に平行した縦書きで「和州俵口村文七」「文政十三年寅之口」、向かって右側には「おかげ参り」と記される。一方、底部には3行縦書きで「うる（閏）三月二日」と記される。墨書された時期は不明であるが、記述内容からおかげ参りに参加した記録であることがうかがえる。

おかげ参りとは、江戸時代に起った伊勢神宮への集団参詣のことで、全国各地から多くの人々が伊勢神宮を目指した。おかげ参りは、およそ60年周期で発生し、宝永2年（1705）、明和8年（1771）、文政13年（1830）などが著名で、延べ1千万人近い人々が伊勢神宮を参詣した。

江戸時代には各地の街道が整備され、往来手形の発行も容易になったため、神社仏閣等を巡る旅もさかんになっていった。特におかげ参りに関しては、通常戸主が代表となって参詣する伊勢講の事例とは異なり、貧富の差、大人・子供、性別に関わりなくあこがれの聖地を参詣できる千載一遇の機会であった。参宮道沿いの町や村では、参宮者に対して宿・食事・風呂などを提供する施行（せぎょう）と呼ばれる接待が行われ、参宮者は柄杓を差し出すと、無償で宿や食事などを提供してもらうことができた。柄杓は安心・安全に道中を進むための重要な旅道具であったといえる。

文政13年のおかげ参りは、3月の下旬に阿波国から発生し、約半年余りにわたって続いた。その間の参宮者は400万人を超えるものであったといわれている。この柄杓の墨書から俵口村の文七は、いち早く参宮したことがうかがえる。この文七については、文政11年の「年中萬覚帳」(生駒市所蔵)の記載によると、当時庄屋を務めていた人物の家族であったことがわかるが、戸主を担う立場にはなかったようである。本柄杓は、そのような文七がおかげ参りに参加し、伊勢参宮という願いを叶えた際に携えたものであり、その質の良さは彼が庄屋の家族であったことを裏付けるものであろう。

おかげ参りの柄杓は、「御陰参宮文政神異記」によると、一般的には参宮者が外宮にたどり着くと、持参した柄杓をその場に置いて帰るのが習わしになっていたようであり、おかげ参りの柄杓が現存すること自体が珍しい。併せて携えた人物の記名も残ることから、当時全国各地で大流行したおかげ参りの様子をより具体的に物語るものである。加えて、日常的に使用される器や道具類が良好な状態で約200年間伝世されている状況を踏まえると、市指定文化財として指定するにふさわしい貴重な歴史資料であるといえる。

柄杓の規模

器高	上端部直径	胴部直径	底部直径	器壁厚さ	容量
5.5~5.8cm	6.2cm	6.6cm	5.2cm	0.5~0.6cm	約100ml



柄杓外面の墨書(展開写真)



柄杓内面



柄杓外面



柄杓底部外面の墨書

※画像の縮尺は約2/3